

# 5章2節 評価問題

酒井将平

## 5章2節1 主体的な学びを促す評価問題

この節では、ICE モデルに基づいて作成された評価問題を紹介します。問題は実際に定期考査で用いられたものも含んでいます。ICE モデルを導入することで、授業での問いも、定期考査での問いも、診断的、形成的な側面を持った評価問題として機能するようになり、学びの流れの中に位置づけられます。そのような問いの働きかけによって、生徒の主体的な学びを促します。

keyword：学びの質、学びの流れ、評価問題、診断的評価、形成的評価、主体性

### 1 ICE モデルに基づいた問いは何が違うの？

ICE モデルに基づいた問いづくりによって、「どれだけ覚えたか」のような学びの量ではなく、「どれだけ深く考えたか」という学びの質を評価することになります。そして、「正解か不正解か」だけでなく、「今どこにいるのか」、「次はどこを目指せばよいのか」というような次の学びへつながるヒントを生徒は捉えることができます [1]。

### 2 ICE モデルに基づいた問いは、なぜ違うの？

ICE モデルが学びの質とそのつながりに着目したフレームワークだからです。問いに対する答えから、ICE ルーブリックに記述された到達目標へたどり着けたかどうかを評価できます。到達目標は、ICE 動詞によって理解や思考、学びの質が明確にされているため、学びの流れの中で「今どこにいるのか」、「次はどこを目指せばよいのか」が明らかになります。

### 3 ICE モデルを導入することで、どう変わるか？

学びの総括としての試験問題から、学びの流れの中にある評価問題へと変わります。ICE モデルでは、問いによって「今、何ができているのか」、「次は何をできるようになればよいのか」が明確になります。つまり、問いが診断的な機能と形成的な機能の両方の側面を持つことになります。そして、試験問題は学びの総括的な評価としてだけでなく、授業中の問いと同じように診断的、形成的な評価として機能することになります。授業と試験が一体となり、学びの流れの中に位置づけられることになります。

#### 4 ICE モデルを試験問題に取り入れる意義は？

学びの質と問いを関係づけて用いることで、問いに「～ができるようになるにはどうすればよいか」という前向きな評価の側面が生まれます。「評価される」のではなく、自ら「評価する」ことを通して、「何をすればよいか」を自分で考えて学びを進めていくことにつながります。つまり、ICE モデルを試験問題に取り入れる意義は、生徒の主体性を育むことにあるということが出来ます。評価問題は、ICE モデルが「目指す方向を確認させてくれるコンパスの役割」として機能する中心的な場面です。実際の作問や採点基準については、本節に続く評価問題の具体例を参照してください。

##### 《参考文献》

- 1 土持ゲリー法一監訳、小野恵子訳（2013）「主体的学びシリーズ」――主体的学び研究所「主体的学び」につなげる評価と学習方法 カナダで実践される ICE モデル」東信堂、p.48